

権力（権威）とお金が人を変える

残念な瀬戸大也選手

瀬戸選手がスポンサーを失う不始末を犯した。大金を得ることができる賞金大会が存在しない水泳競技で、億を超える大金を得ることができる瀬戸選手は例外的な存在である。それもこれも、爽やかなイメージキャラクターとして企業がスポンサーしたことの見返りである。そのイメージを壊してしまえば、スポンサーを失うのは当然である。その瞬間から手にするはずのお金が入らなくなる。

一度手にした大金の味は忘れられない。永遠に大金が入ると錯覚しがちだ。だから、維持費のかかる高級乗用車を何台も購入する。選手寿命は限られているからいずれスポンサーの支援はなくなる。無駄遣いしないで、その日のために蓄えようとは考えない。あたかも永遠に大金が流れ込んで来る錯覚に取り憑かれてしまう。それを諫める人がいなかったのか、あるいは諫める人を敬遠してしまったのか。

20代そこそこで途方もない大金を手にしたスポーツ選手は道を誤ることが多い。使い切れないお金を手にすることで、生活も考え方も変わってしまう。高価な車を何台も購入し、銀座のクラブで散財するのは典型的なパターンである。挙げ句の果てに薬物に手を出す選手もいる。春先に深夜の銀座のクラブ入口で、たばこをふかす西武ライオンズの若い選手の写真が某週刊誌に掲載された。たばこを吸い、深夜に銀座を徘徊するなど、プロスポーツ選手の自覚が足りないと言われても仕方がないだろう。分不相応な大金を手にした若者が陥る典型的な事例である。

あぶく銭は人を変えてしまう。汗水たらして自分で稼いだお金なら、無駄な金遣いはしないだろう。あぶく銭は怖い。人を変えてしまう。

権力もまた人を変える

権力を得れば、公金を動かす力も得る。権力の座が長くなれば、公金と私財との区別がなくなってくる。だから、右左にかかわらず、あらゆる権力は腐敗する。ロシアや中国の統治者は、公営企業の売上げを掠（かす）め、私的企業から「みかじめ料」を取ることで莫大な資産を形成している。今の日本社会で政治家がこれほどあからさまに企業に寄生することはできないが、官邸機密費や政府発注を通して、それなりのお金を回すことができる。公金を使って後援会を接待し、公的発注の一部が回り回って自分の懐に入ってくる仕組みを作ることは難しくない。

権力的立場を誇示して人々を従わせることができるようになり、公金を動かせるようになると、統治者はその魔力から逃れなくなる。だから、権力者は可能な限り、長期に権力の座に居座りたいと思うようになる。あたかも「神聖の王」のように終身、特権的な座にいたいと考えるようになる。絶対権力者が「世俗の王」として君臨する必然のロジックである。これが各種の独裁政治を生む。資本主義を標榜しようと社会主義を標榜しようと、このロジ

ックの貫徹から逃れることはできない。

ヤクザな政治家

日本の政治家になるのに教養も知性も要らない。逆に、生半可な知性は政治家としての成功を阻害する。漢字が少々読めなくても日本の首相になる障害にはならない。外国語ができなくても困ることはない。ただ、国際的な場で、日本の首相の知性の低さが露呈されるのは少々恥ずかしい。

菅首相のヴェトナム訪問時に、いろいろな言い間違いがあったと報道されている。ASEANを「アルゼンチン」と言い間違えた不可思議は、何かの思い込みがあったのか、それとも英語綴りが読めなかったのかのどちらかである。もう一つのユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) のカバレッジを、カレッジと読み間違い、訂正することがなかった点は、菅首相の学力を教えてくれる。多分、coverage という単語を知らなかったのだろう。英語の学力がかなり低い、あるいはほとんどないことを証明している。

静岡県知事は「教養がない」と菅首相を批判したことにたいし、知事が卒業した早稲田大学と菅首相が卒業した法政大学の学歴を差別するものだという非難が殺到したようだ。教養水準を学歴で測ることはできないが、菅首相の一般学力水準が低いことは確かである。基本的な学力は大学ではなく中学や高校で形成され、知性は大学の勉学で形成される。大学進学前の成績が良くなかった菅首相が少し難しい英単語を知らないことは十分にあり得る。それは市井の人々のなかで日常茶飯にみられることである。一般学力が低くても、社会や歴史への洞察力を獲得して、知性を磨くことができる。そのためには、大学時代の読書は欠かせない。しかし、学力が低く、大学時代に知性を磨くことができなかつた人は、教養に欠けると言われても仕方がない。

学力水準の高い官邸の補佐官はまさか首相にもなろうとする人が、カバレッジという単語を知らないとは思わなかつたのだろう。しかし、今後は英語の読みや漢字の読みをきちんと確認して、ふりがなを振って懇切丁寧に予行演習すべきだろう。

学力が低くても、日本の首相になることに何の障害もない。学力や知性があっても、それで優れた実業家になれるわけでもないし、政治家として評価が得られるわけでもない。政治家菅義偉が国会議員の書生から首相に成り上がった最大の力は、学力でも教養でも知性でもない。権威を笠に着た「恫喝力」である。自分の意見に従わない者や批判的な意見を述べる者を左遷し、職から外すという「恫喝」と「見せしめ」が、自らの地位を高めることを体得してきた政治家である。こういう日本の政治家の手法は、ヤクザの手法と酷似している。今の日本の政治なら、暴力団の組長でも十分に政治家が務まる。

楯突く者や簡単に引き下がらない者にはいちゃもんを付けて恫喝し、落とし前を付けさせる（「見せしめ」）。ヤクザが堅気の人々を脅す手法は、「いちゃもん」、「居直り」、「恫喝」、「落とし前」である。まさに政治家菅義偉が長い政治生活で学んだことは、ヤクザの手法にすぎない。それが政治権力の行使だと錯覚している。2014年の「クローズアップ現代」で、

国谷裕子キャスターに詰め寄られ、恥をかかされたと思った菅官房長官は、官邸を通して、NHK 幹部に脅しをかけたと報道されている。自分を批判する者、恥をかかせた者への復讐心は人一倍強い。それが政治家菅義偉の政治家としての最大の強みだと考えているからだ。逆に言えば、権力の虎の威を借りることができなくなれば、ただの「おっさん」でしかない。「恫喝」することで、周辺が縮こまり、簡単に反対意見を言うことがなくなり、主人に都合の良いことばかり進言するようになる。忖度が必然化する理由である。

学術会議問題

学術会議問題をめぐる菅首相の言動を見ていると、やはりこの人は知性に欠けるという印象を免れない。自分の考えや意思を明確に述べることができない。官僚が作ったシナリオをそのまま実行する能力しかない。官房長官時代はそれで良かった。しかし、それでは一国の宰相は務まらない。

6名任命拒否にたいする最初の説明は、「自分は6名を除いた名簿しか見ていない」という逃げ口実だった。首相の任命権に反すると批判されると、今度は「総合的俯瞰的に判断した」という官僚が考えついた口実を繰り返すだけだ。誰が任命拒否判断を下したのか明言することができない。前言との違いを説明することができない、あるいは説明しなくても良いと考えている節がある。論理一貫性という知性が存在しない。

だいたい、総合的俯瞰的な能力のない人々が使っている言葉だから、説得力がない。総合的俯瞰的が無内容だと指摘されると、今度は「大学の偏りや地域の偏りを直す必要がある」と理解不能な弁明に陥る始末である。支離滅裂とはこういうことを言う。それを恥じる知性も理性もない。

「杉田官房副長官の判断に任せていたために、旧来の慣行から外れたことになりました。問題を複雑にしないために、旧来の慣行通りに、全員の任命を行います」と言えばそれで済むものを、「官房副長官が公安情報にもとづいて選別した」ことを追及されるのが困るから、あれこれ官邸補佐官や担当省の幹部の知恵を借りて、次々と理由を変えていく。上司に忖度する余りに、官邸補佐官自身が墓穴を掘っている。菅首相は自らの言動の矛盾を感じることなく、ただただ補佐官のシナリオを次から次へと実行しているだけなのだ。

なんとも情けない宰相である。それでも国民の過半がそれで良いと考えているなら、国民の知性レベルに相応しい宰相だということだろうか。